

平和への願い新たに

演劇を 楽しむ会 22回目の朗読小公演

鹿角市の演劇を楽しむ会(村木哲文会長)が主催する朗読の会「戦争と暮らし」が27日、市文化の杜交流館コモッセ文化ホールで開かれた。会員が用意したのは、空襲や疎開、戦後の引き揚げなどを経験した一般人の手記や絵本、平和への願いがこもった詩、特攻隊員の妻たちの座談会を会話劇にしたものなど。出演した会員8人と花輪図書館職員3人は、その時代に生きた人々の「心の叫び」を観客

に届け、平和への願いを改めて強くしていた。戦争の記憶の急速な風化が指摘される今日、同会は毎年8月「語り継ごう戦争の記憶を」を合い言葉に、平和への願いを込めて小公演を開催し続けており、今回で22回を数える。これまで読み伝えてきた文や詩は100編を越える。今回は花輪図書館(小林光代館長)の100周年記念事業として、楽しむ会と図書館が共催。前日26日に同ホールで

鹿角民話の会(ことほらえ)が開催する「子どもとともに語りつく、八郎太郎三湖伝説」と共に「語りと朗読の2日間inコモッセ」として開いた。この日は、約50人の市民らが駆け付け、幕が上がると出演者全員で戦没学徒の手記「きけわだつみのこえ」の序文に載ったフランスの詩人ジャン・タルジューの詩を朗読し、戦争の記憶を語り継ぐことの大切さを訴えた。会員が朗読したのは、2004年に84歳で亡くなった詩人の石垣りん氏が戦没者に寄せた「弔詞」、広島島の原爆投下に寄せた「挨拶」、激戦区サイパンで崖から身を投げた人々を思った「崖」の3編の詩をはじめ、戦争の記憶を後世に伝える新聞投稿、特攻隊員の妻へのインタビューを元にした会話劇など、多彩な表現形式で描かれた戦争の悲劇。



思いを込めて朗読する会員たち(コモッセ講堂)

特に若者にも感心を持ってもらいたいと近年は絵本を題材に取り入れており、沖縄戦にまぎこまれた少年の物語「なきむしせいとく」(作・田島征彦)では、会員4人が役を振り分けて朗読。空襲で家を焼き出され、避難先の洞窟を転々としながら逃げていく家族の様子を少年の視点で描かれており、泣きやまない赤児を黙らせるため日本兵がその命を絶つ

たり、銃撃戦によって目の前で母親を亡くす主人公の様子が観客の胸を締めつけた。

また、小学校の国語の教科書に掲載された「つの花」(文・今西祐行、絵・鈴木義治)では、徴兵された父親と、幼い娘の別れの場面が描かれており、一輪の花を手に喜び笑う娘を見ながら父親が汽車に乗り込む場面で観客は目頭を押さえていた。

脚本と演出を手掛けた高木豊平さんは「実際に戦争を体験した人たちが少なくなる中、戦争の記憶は遠く、間接的なものに変わってきた。戦争の実態に思いが及ばなくなった時に戦争は近づいてくることを胸に、

平和についてこれからも考えていきたい」と話し、村木会長は「皆が気持ちを含めて出来て良かった。これからも本公演と朗読公演を2本柱に活動を続けていく」と意気込んだ。